

心からの感謝をこめて

梶 哲 夫

私たちの学会の会長である朝倉隆太郎先生が、昭和60年3月31日をもって筑波大学を停年でご退官になる。いつの日かこの日がくることは承知していたのであるが、現実はこの日を迎えることとなり、会員の皆さんに代わり、先生を送ることばを述べることになったのは全く感無量である。

本誌の冒頭で先生が「退官にあたって」を書かれ、そこで触れておられるように、先生が筑波大学においていただくについては、かなりご無理を申し上げたいきさつがある。その背景としては、本学会の中核をなしている筑波大学大学院修士課程教育研究科教科教育専攻のうちの社会科教育コースが、他の諸コースに比べて発足が一年おくれたという事情が存在したのである。このことに関して、私は、社会科教育コースの卒業記念として学生諸君が手づくりで作成している、「桐峰」の第1号の誌上において、次のように記しておいた。

「大塚から筑波へ、この激動の歩みの中にあって、東京高等師範学校以来の教員養成の伝統をなんとかして、新しい筑波大学に芽生えさせたいというのが私たちの願望でした。東京教育大学は、その名称と伝統から、世間からは中等教員の養成を中心とした大学のようにみられてきてはいましたが、実はそのような性格の大学ではありませんでした。意外に思う人がいるでしょうが東京教育大学の成立の時の諸事情からそのようになってしまったのです。したがって、私たちとしては、筑波大学においては、名称こそ教育大学と無縁になってしまっても、実質において、中等教員養成の中核となるものを創設したいと願ったのであって、このような切実な願いが教育研究科、特に教科教育専攻の成立の根底にあったのです。

ところで、この願望は、昭和53年度からほとんど達成されることになったのですが、教科教育専攻のうち社会科コースだけは日の目を見ることができませんでした。このコースの設立に努力してきた私にとって、この時の悲痛な思いは、おそらく生涯忘れることができないでしょう。社会科教育コースの成立はきわめて難産だったのです。他のコースと比べて一年おくれて成立したということは、永久に残る事実となってしまったわけです。……」

このような社会科教育コースの設立をめぐる困難な諸問題を解決するために、朝倉先生のご出

馬を切望申し上げたのである。当時、先生は宇都宮大学で重要な立場にあり、附属中学校の校長もなされ、筑波大学に移られるということは容易なことではなかった。また、栃木県における社会科の先生方への指導者としての立場とその役割は、全国的に周知のことであって、この点からも難しい状況であった。さらに、その生涯を栃木県の教育界に尽くされた父上が、宇都宮に住まわれ、病床にあられたこともあって、先生が宇都宮大学から筑波大学へということは、公的にも私的にもきわめて支障が多かったのである。しかし、このような状況にもかかわらず、先生は母校の伝統の継承と発展のためということで決断し、私たちの切望に応じてくださった。当時の感激は、私にとって忘れることのできないものとなっている。

一年おくれて発足した社会科教育コースはそれだけに問題が多く、このコースの基礎をつくりさらにこれを中心として学会までつくるということは大変なことであった。先生が私たちの先頭に立って、どれくらいの努力をなさったか、そしてその育成と発展に全力投球されたかは改めていうまでもないことである。

ところで、私にとって忘れがたいことの一つは、昭和54年1月1日付けで筑波大学にこられた先生が、社会科教育コースが発足する54年度を迎える準備で多忙をきわめる状況にあって、4月7日(土)、父上を筑波大学につれてこられて車椅子で学内を案内されたことである。4月11日～12日の最初の入学試験を直前にして、父上を大学に案内された先生の胸中を推察し、私自身しみじみとした体験をしたのである。社会科教育コースの発足の時点において、このようなことがあったことを記しておきたいと思う。

当初は研究室も不足のため、私は先生と同室ですごしたのであるが、二人とも大変なヘビースモーカー(私は三年前やめました)だったため、研究室の中はもうもうたる状態でしたが、社会科教育コースの育成、発展について熱っぽく話し合ったことが懐かしい。五十代半ばの二人が、青春のころの情熱をもやしたような思い出となっている。以来六年間、先生の教育と研究への取り組みを直接拝見させていただいたが、先生はまさに、東京高等師範の伝統の中から生まれてきた教師であると完全に脱帽した次第である。先生が具体的に示された教師像は、私などはとてもまねすらできないもので、まぶしいくらい存在感を私たちに与えてくれたのである。

本学会の会長のみでなく、日本社会科教育学会、日本地理教育学会の会長など多くの責任ある立場にありながら、社会科教育コースの基盤を築き、本学会の基礎をつくられ、その発展に努力されてこられた。それは大変な仕事量であるが、先生は、これらの仕事に対して、ねをあげることなく、きわめて楽しそうになさってこられたことも私にとっては驚きであった。そして、先で紹介した卒業生の記念文集である「桐峰」の表紙は、先生の木版画によって飾られてきている。第1号の文科系修士棟をはじめとして、毎年先生の手による表紙が私たちを楽しませてくれてき

たのであるが、これからはどうなるのであろうか。

先生の学生諸君に対する愛情は、まことに深く、各人の進路と将来を考えられる姿勢には敬服するのみでした。ここに卒業生とともに改めて感謝申し上げます。ご退官後も私たちの学会の一員であることは不変だと思えます。今後とも、学会の発展にお力添えをいただきたいと存じます。私たちも先生のご貢献を大切にしながら努力してまいります。

会員一同とともに、心からの感謝をこめてお礼申し上げますとともに、ご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。（昭59・11・3）

（筑波大学教育学系）

朝倉隆太郎教授の略歴・主要業績

略 歴

- 1921年8月7日 栃木県宇都宮市に生まれる。
- 1928年4月 栃木県女子師範学校附属小学校に入学
- 1933年10月 栃木県足利郡北郷第三尋常小学校に転校，翌年3月同校卒業
- 1934年4月 栃木県立足利中学校に入学，1939年3月同校卒業
- 1939年4月 東京高等師範学校文科第四部に入学，1942年9月同校卒業
- 1942年10月 東京文理科大学地学科地理学専攻に入学，1945年9月卒業
- 1945年9月 東京都立上野中学校教諭
- 1947年5月 東京高等師範学校附属中学校教諭
- 1947年5月 東京都立上野中学校教諭に併任（1948年5月まで）
- 1951年9月 兼ねて東京教育大学・東京高等師範学校助教授
- 1952年4月 東京教育大学附属高等学校教諭兼ねて東京教育大学助教授
- 1956年6月 文部事務官，文部省初等中等教育局中等教育課
- 1958年11月 文部省初等中等教育局中等教育課，教科調査官
- 1963年4月 宇都宮大学助教授学芸学部
- 1968年4月 宇都宮大学助教授教養部
- 1970年8月 宇都宮大学教授教養部
- 1972年4月 宇都宮大学教授教育学部
- 1974年4月 宇都宮大学教育学部附属中学校長に併任（1978年3月まで）
- 1979年1月 筑波大学教授教育学系（1985年3月まで）
- 1979年1月 宇都宮大学教授教育学部に併任（1979年3月まで）
- 1984年5月 筑波大学大学院修士課程教育研究科長に併任（1985年3月まで）

兼 任

- 1950年4月 中央大学通信教育部講師（1953年3月まで）
- 1969年4月 栃木県立養護教諭養成所講師（1970年3月まで）
- 1972年4月 日本女子大学講師（1985年3月まで）
- 1972年10月 お茶の水女子大学講師（1984年3月まで）
- 1972年10月 広島大学講師（1973年3月まで）

- 1974 年10月 広島大学講師（1975 年3月まで）
- 1979 年10月 宇都宮大学講師（1980 年3月まで）
- 1984 年4月 上越教育大学講師（1985 年3月まで）

賞 罰

- 1976 年10月 財団法人日本教育連合会から表彰，「社会科学習能力の発達と育成」，日本地理教育学会の推薦による。
- 1983 年10月 同上，「地理教育の理論と実践」，日本社会科教育学会の推薦による。
- 昭和59年11月 栃木県教育連合会から特別功労賞を受ける。

学会及び社会における活動

- 1968 年9月～11月 総理府第2回青年の船主任教官，東南・南アジア7か国巡航
- 1971 年10月 日本地理教育学会副会長（1974 年9月まで）
- 1973 年4月 統計審議会専門委員，国民生活・社会統計部会（現在に至る）
- 1974 年1月 ユネスコ主催：人口教育についての大学教育学部等の役割に関する専門家会議（バンコク）に出張
- 1974 年1月～3月 文部省在外研究員としてサンジェゴ州立大学3（アメリカ）及び地理学協会（イギリス）に出張
- 1974 年8月 ユネスコ主催：アジア人口教育ソースブック会議（バンコク）に出張
- 1974 年10月 日本地理教育学会副会長・常任理事長（1982 年3月まで）
- 1975 年8月 日本社会科教育学会副会長（1980 年3月まで）
- 1978 年1月 1980 年 I G C（国際地理学会議）第11分科会「地理と教育」の世話人（1980 年9月まで），1980 年9月第11分科会を主催
- 1980 年4月 日本社会科教育学会会長（1985 年3月まで）
- 1980 年4月 全国統計教育研究協議会副会長（現在に至る）
- 1982 年2月 筑波大学社会科教育学会会長（1985 年3月まで）
- 1982 年4月 日本地理教育学会会長（1985 年3月まで）
- 1982 年11月 財団法人大学基準協会専門委員（現在に至る）

文部省関係 (*印は省内で担当, その他は作成協力者)

中学校高等学校学習指導要領 社会科編(試案) 昭和26年(1951) 改訂版

中学校学習指導要領 社会科編 昭和30年度改訂版

高等学校学習指導要領 社会科編 昭和31年度改訂版

* 中学校「道徳」の実施要領(昭和33年3月15日公表)

* 中学校学習指導要領(昭和33年10月1日告示)

* 『地名の呼び方と書き方<社会科手びき書>昭和33年』大阪教育図書 1959

* 中学校社会指導書 1959

日本国内ユネスコ国内委員会『学校における国際理解教育手びき』昭和35年3月

* 高等学校学習指導要領解説 社会編 1961

* 『郷土学習 — 中学校社会科指導事例集』東洋館出版 1963

小学校学習指導要領(昭和43年7月11日告示)

小学校指導書社会編 昭和44年5月

中学校学習指導要領(昭和44年4月14日告示)

中学校指導書社会編 昭和45年5月

高等学校学習指導要領(昭和45年10月15日告示)

高等学校学習指導要領解説 社会編 1972

小学校学習指導要領(昭和52年7月23日告示) 社会小委員会主査

小学校指導書 社会編 昭和53年5月 社会小委員会主査

中学校学習指導要領(昭和52年7月23日告示)

中学校指導書 社会編 昭和53年5月

小学校社会指導資料『指導計画の作成と学習指導』昭和55年7月

主要な編著書 (論文を除く)

地理学・地理教育

朝倉隆太郎・松沢光雄共著『野外観察の学習指導』古今書院 1960

尾崎馬四郎・朝倉隆太郎共著『中学校社会科地理指導の研究と実践』葵書房 1962

日本ユネスコ国内委員会『地理学習の指導法』古今書院(共訳) 1966

朝倉隆太郎・榊原康男・班日文雄共編著『地理, その教育』葵書房 1967

青野寿郎・尾留川正平編『日本地理 第5巻』二宮書店 1968

(栃木県内地誌, II 足利・栃木, III 日光 を担当)

- 朝倉隆太郎編『地理的分野の評価事例』明治図書 1972
朝倉隆太郎編『中学校社会科指導細案 — 地理的分野』明治図書 1974

社会科教育

- 朝倉隆太郎『社会科教育法』中央大学通信教育部 1950～1953
朝倉隆太郎編・栃木県教育研究所著『社会科教材研究の方法』明治図書 1967
朝倉隆太郎・中川浩一共編『詳解全国社会見学大地図』東洋館図書 1967
内海巖・小林信郎・朝倉隆太郎共著『道德教育と社会科指導』光風出版 1970
朝倉隆太郎・大森照夫・小林信郎共編『小学校社会科指導事典』第一法規 1971
朝倉隆太郎・栃木県教育研究所共著『続社会科教材研究の方法』明治図書 1972
朝倉隆太郎・平田嘉三・梶哲夫共編『小・中・高校社会科の精選と系統化』明治図書 1975
小林信郎・朝倉隆太郎共編『改訂小学校学習指導要領の展開』明治図書 1977
朝倉隆太郎・里野精一共編『新しい小学校社会科の展開』中教出版 1977
朝倉隆太郎編『新社会科指導法事典』明治図書 1979
朝倉隆太郎・梶哲夫・横山十四男共著『中学校社会科教育法』図書文化 1981
教科書研究センター編『教科書からみた教育課程の国際比較』第3巻 社会編
ぎょうせい(共同執筆) 1984

地名

- 教科書研究センター編著『地名表記の手引』ぎょうせい(作成委員長) 1978

統計教育

- 全国統計教育振興協議会『統計教育の手びき』(作成委員) 1965
朝倉隆太郎『指導のための統計の理解』中教出版 1972
全国統計教育研究協議会『統計教育の手びき』昭和52年度改訂版(監修) 1977

児童生徒用図書(教科書を除く)

- 朝倉隆太郎『わが郷土 栃木県』清水書院 1949
朝倉隆太郎・小倉義光共編『簡約 地学』昇産堂出版 1951
朝倉隆太郎『世界の自然と生活』向上社 1953

朝倉隆太郎『人文地理問題新研究』向上社	1954
朝倉隆太郎『要点研究 人文地理』向上社	1955
朝倉隆太郎・牧重孝『必修 人文地理』昇竜堂出版	1956
朝倉隆太郎・牧重孝『人文地理小事典』續文堂出版	1957
朝倉隆太郎『世界の風土』国民図書刊行会	1960
野村正七・朝倉隆太郎・牧重孝・芦刈孝『読解 地理』昇竜堂出版	1963
朝倉隆太郎『ひとりで学べる中学校の地理の先生』昇竜堂出版	1963
朝倉隆太郎『中学社会 A級地理問題集』昇竜堂出版	1971
朝倉隆太郎・竹松貞雄・岡本忠篤『中学Aクラスの地理』昇竜堂出版	1972
野村正七・朝倉隆太郎・牧重孝・芦刈孝『研修 地理B』昇竜堂出版	1973